



こーひーぶれいく

懐かしい風景

米倉 義晴

Yonekura Yoshiharu

東京に来てからそろそろ12年になる。この間、関西に戻る機会があるととても懐かしく感じる風景がある。東海道新幹線で関が原を過ぎて滋賀県に入ると、琵琶湖の向こうに山々が連なっているのが見えてくる。琵琶湖のほとりで育った筆者にとっては、子供の頃いつも眼にしていた比叡山や比良山の山々を見るとほっとする。

誰にも自分の育った故郷があり、子供の頃の懐かしい思い出が蘇ってくる場所がある。最近では街の様子が大きく変わってしまってその名残を探すのも難しいことが多い。懐かしい風景にしばしば出会えるのは幸せである。

32歳の時に家族を連れて米国ニューヨーク州のロングアイランドで過ごした経験がある。日本からニューヨークのケネディ空港に着くと、マンハッタンとは逆方向の東に向かってロングアイランドを車で走ること約1時間半のところに、ブルックヘイブン国立研究所(BNL)がある。もとは米軍のキャンプ地だった広い敷地の中に、加速器等の研究施設が点在していた。その敷地内のアパートで2年間過ごしたが、時間を経るに従って何か物足りないと感じていた。

ロングアイランドは文字通り細長い島である。ニューヨークのマンハッタンとはイーストリバー(名前は川だが実際は海峡)を挟んで隣接し、東西190kmにも及ぶ大きな島である。研究所の敷地から見える風景は、平坦な土地に点在する低い建物と近くの雑木林、そして広い空だけである。最高点でも海拔100m余りしかない平坦な地形で、どこまで走っても山が見えない。小さな時からずっと当た



バリ島の棚田の風景

背後のアグン山は神の宿る聖なる山として信仰の対象となっているが、残念ながら雲に隠れていた。

り前のように山と湖を見ながら過ごしてきた筆者にとって、これはショックだった。

その後日本に戻ってから過ごした京都や福井は周囲を山に囲まれていて、どこにいても美しい山並みを望むことができた。そんなこともあって、関東に移ってきたときに、山は無理でも、せめて水の見えるところに住みたいと思った。結果として選んだ部屋からは、近くの川の一部を眺めることができたが、しばらくしたら近くに建てられた新しいマンションによって視界が大きく遮られてしまった。なかなか難しいものである。現在住んでいる部屋から見える眺めもいずれどうなるか分からないが、近くの運河沿いを散歩することを楽しんでいる。

ところが、最近知人に招かれてインドネシアのバリ島を訪問する機会があり、そこで出会ったのが、日本の山里のような棚田の風景である。島内では水田による稲作が行われているが、山間の土地では山から流れてくる豊富な水をうまく利用して整然とした棚田が作られていた。まさに、日本の原点を思わせるような懐かしい風景に接して、ますますこの土地に対する親近感が増した。生まれ育った土地を思わせる懐かしい風景は、とても心を和ませてくれる。

((公社)日本アイソトープ協会)